

## 新しいエルサレムの特徴 (前半) [要約]

黙示録 21 : 9 ~ 27

- 9 また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」
- 10 そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。
- 11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。
- 12 都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。
- 13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。
- 14 また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。
- 15 また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る金の測りざおを持っていた。
- 16 都は四角で、その長さとは幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。
- 17 また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキュスあった。これが御使いの尺度でもあった。
- 18 その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。
- 19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髄、第四は緑玉、
- 20 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。
- 21 また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。
- 22 私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。
- 23 都には、これを照らす太陽も月もない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。
- 24 諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。
- 25 都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。
- 26 こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。
- 27 しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行う者は、決して都に入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、入ることができる。

### (A) 聖なるみやこエルサレムの揭示

黙示録 21:9 また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」  
天使がヨハネに話しかけている。ここに来なさい。  
「小羊の妻」 = 「新しいエルサレム」

黙示録 21:10 そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。

黙示録 21:11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

「神の栄光があった」・・・私達は毎週の日曜日に、「主の御名があがめられますように」と唱えています。が、「神様がほめたたえられていた」という意味です。

### (1) 都には神の栄光があった。

黙示録 21:12 都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。  
ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン、ダン、ナフタリガド、アシエル、ヨセフ

### (2) 城壁

敵が攻めてくることはない。12の門がある。天使が12人おり  
1つの門に1人の天使がいた。12部族の名前が書かれていた。救われたユダヤ人がいた。

### (3) 城壁の土台

黙示録 21:14 また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスとマタイ、ヤコブとタダイ、シモンとイスカリオテ・ユダ

#### (4) 広大な面積

黙示録 21:16 都は四角で、その長さと同幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。

黙示録 21:17 また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキウスあった。これが御使いの尺度でもあった。

「12000 スタディオン」=12000×185=2220 扣（北海道から沖縄までの距離）

「144 ペーキウス」=65 メートル

#### (5) 材質

黙示録 21:18 その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。

黙示録 21:19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髄、第四は緑玉、

黙示録 21:20 第五は赤緋めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

碧玉、ガラスに似た純金

黙示録 21:21 また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。

一つの門は一つの真珠でできていた

#### (6) 不要になった神殿

黙示録 21:22 私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである

神殿は不要になった。小羊が神殿だからです。いつもキリストにお会いできる。

黙示録 21:23 都には、これを照らす太陽も月もない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。

黙示録 21:24 諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。

太陽と月なくなる。「諸国の民」=「異邦人」

#### (7) 小羊の命の書に名が書かれている者

黙示録 21:25 都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

黙示録 21:26 こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。

夜がないということは、栄光の体に変えられるので寝なくてもよくなる。

黙示録 21:27 しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りを行なう者は、決して都には入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。

福音を信じているものだけが、入ることが出来る。

Ⅰコリント 2:9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

エデンの園の回復、新天新地、永遠の都。天国に入れていただくには、「イエス様が私たちが愛して私たちの罪の身代わりとして十字架で死んでくださったことを信じる」だけでよいのです。

#### 【結論】

天国はどのようなところだと思いますか。多くの人は、花が咲いていて、暖かくて良い所というイメージを持っています。しかし天国はⅠコリント 2:9 に書かれているように、「人の心に思い浮かんだことのないものです。」天国に入れていただくためには、「イエス様が私たちの罪の身代わりとして十字架で死んでくださった」と信じればよいのです。多くの人が、天国へ入れていただけない原因は、私はクリスチャンにあると思います。ノンクリスチャンは何も知らないのですから、クリスチャンが宣べ伝えなくて、誰が宣べ伝えるのですか。私はエゼキエル書を読んで教えられたこととお話しします。

エゼキエル書は祖国を奪われ、神殿が壊され、捕囚となった絶望的な中で、神がイスラエルの民をどのように回復させ、救われるのかに関する預言を盛り込んでおられます。神はイスラエルの民を懲らしめますが、回復されます。神が懲らしめる目的は「裁き」ではなく、「回復」です。

#### 干からびた骨の幻による回復

主のみ手がエゼキエルに下り、主の霊によって連れ出し、骨の満ちた谷に行かれました。

エゼキエル書 37:1 主の御手が私の上であり、主の霊によって、私は連れ出され、谷間の真中に置かれた。そこには骨が満ちていた。

共同墓地に行かれたのです。聖霊はエゼキエルをそれらの骨の中を行かせました。この時、エゼキエルは骨が無数に多いという事と、それらの骨がひどく干からびているのを見ました。

エゼキエル書 37:2 主は私にその上をあちらこちらと行き巡らせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干からびていた。

死んでかなりたち、干からびてねじれた骨が数えられないほど広がってる光景を目撃したのです。

ところが突然、御霊がエゼキエルに尋ねられました。

エゼキエル書 37:3 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたがご存じます。」

実にこれはあきれた質問です。まるで、「あなたが伝道したから日本人が救われるだろうか、和歌山のわたしの姉、兄、弟が救われるだろうか。」という質問のようです。これに対する結論は簡単です。「100%不可能です」と当然答えるでしょう。しかし、エゼキエルはそのようには答えませんでした。

「神、主よ、あなたはご存じです」「はい」とも「いいえ」ともいえない状況だったからです。ここで重要なことが教えられます。「私達にはすべてのことが不可能です、しかし、神様にはすべてが可能で、それです」そうではなく、私達には不可能に思えることが神様には可能なのです。私たちは自分の経験、自分の常識から考えれば不可能ですが、神様には可能なのです。エゼキエルが答えると、神様はエゼキエルに向かって語られました。

エゼキエル書 37:4 主は私に仰せられた。「これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。主のことばを聞け。

エゼキエル書 37:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。

エゼキエル書 37:6 わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが主であることを知ろう。」

骨に言え、というのです、これは骨に福音をかたれというのです。まさに日本人に福音を語ることは骨に福音を語るようなものです。骨に福音を語るのであれば聞かれなくて当然です。ダメモトで気が楽になります。

以前お話をしましたが田村先生はインドネシアで教会堂を増築するので、宣教献金から 250 万円かりて、滝山教会から 100 万円献金していただいて 350 万円で教会堂を増築しようとしたのです。いつもは三菱銀行に預けるのですが、インドネシアの銀行の方が利子が高いので、インドネシアの銀行に預けたのです、しかし、しばらくしてインドネシアの銀行が銀行封鎖になり、お金がおりなくなったのです、350 万円帰ってこないのです。会堂増築の話はおじゃんです。田村先生のどうすることもできなくてテレビを見ていたら明子先生から、「あなた、今はテレビを見ている時じゃないでしょ」と言われて聖書を読んでいたら、

ローマ 4:17 このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。

ローマ 4:18 彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」

と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。彼は望みえないときに望みを抱いて信じた。ダメモトでいいから祈ろうと祈ったそうです。お金が返ってこなくてもいいから祈ろう。そうしたら、しばらくしてインドネシアの銀行封鎖が解除されてお金が返ってきたのです。私たちが福音を語るのもダメモトでいいと考えると楽になります。

骨に福音を語るのですから気が楽です。これが主の働きです。自分にできそうだから伝道する、これは神様の働きではありません。しかし私のやっていることは自分にできそうだからやっているのです。エゼキエルが骨に向かって語るべきことは「干からびた骨よ、主の言葉を聞け」です。これは壁に向かって語れというのと同じです。神様は時には私たちにできそうにないことをするように命じられます。自分の常識では理解できない事、自分の力ではできそうにないことを、やるように命じられることがあります。救いは自分の理性や常識で理解できるものではありません。信仰は私を信じるのではなく神様を信じることです。

エゼキエル書 37:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。

これはさらにあきれた話です。骨が生き返る条件が示されました。それは「息を吹きいれる」ことです。息、すなわち聖霊が吹き込まれば、骨は生き返るというのです。神の息が吹き込まれるのですから不可能なことがあるでしょうか。死んだ者が生き返り、不可能が可能になるのです。奇跡が起こるのです。神様は続けて仰せられました

エゼキエル書 37:6 わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが主であることを知ろう。」

ここを読みますと、骨が生き返るには一連の過程があることがわかります。骨を生き返らせるときに「ただ生き返れ」と命じると、骨がさっと立ち上がり生き返るではありません。まず、骨の上に筋がつかなければなりません。これは、体のすべての神経細胞と血管を再生させることを意味します。骨の上にすべての神経細胞が再生されれば、その上に肉が生じ、皮で覆われなければなりません。あなたは今、病や、苦痛や、これから何をやればよいかわからずに苦しんでいませんか。だとしたら「神の息が私に吹き込まれるようにしてください、神の御霊が私に入ってきますように願います」と祈ってください。そうすれば問題が何であれ、エゼキエルの幻の中で骨に筋と肉が付き皮膚が出来たように、それらすべてのことが一瞬にして解決されるのです。神様は裁きもしますが、救い、回復して下さる方です。

エゼキエル書 37:7 私は、命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。なんと、大きなとどろき。すると、骨と骨とが互いにつながった。

エゼキエル書 37:8 私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。

エゼキエルは神様が命じられた通りにしました。これが信仰です。神様が語られたみ言葉なしに、自分の考えでやっても成し遂げられません。しかし、神様が命じられたとおりに従えば、素晴らしい奇跡が起きます。神様がエゼキエルに向かって言えと命じられました。エゼキエルは従順に従いました。

常識的には従えないことですが、エゼキエルは従いました。骨に向かって語る、常識では理解できないことを語りました。すると骨が動き始めました。神様の命令通り預言すると、骨がカタカタと動き始めました。散らばっていた骨が元の位置に戻り、たがいにつながり、筋が付き、私はこれが実際起こったと信じます。しかし、一つ足りないことがありました。

エゼキエル書 37:8 私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。

何がなかったのでしょうか、息がありませんでした。大部分の人々は、骨が動き、筋が付き、皮がその上を覆い、肉が生じれば、神様の奇跡が起こったと言います、しかし、違います、決定的なものが欠けています。

ヨハネ 6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことは、霊であり、またいのちです。  
肉があるからと言って完成されたものではありません。生かすのは霊です。神様の聖霊が下って、ようやく完成するのです。私達にも息が吹き込まれ、奇跡が起こりますように、干からびた骨に筋が付き、その上を肉と皮がおおうだけではなき息が吹き込まれるように祈ります。

エゼキエル 37:9 そのとき、主は仰せられた。「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。」

エゼキエル書 37:10 私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中にはいった。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった。非常に多くの集団であった。  
神様はエゼキエルに息に命令するように言われました。この時息を動かしたのは誰ですか、エゼキエルではありません。神様がエゼキエルを通して、息に命令されたのです。あなたが「生きよ、動け」と言って息が動くでしょうか。息を動かすのは私達ではありません、神様です。エゼキエルが神様のみ言葉を預言すると、息は四方から来て、骨の中に入りました。神様の息は一つのところにあるのではなく東西南北全てのところにあります。エゼキエルは息に向かって、骨に入るように命じました。神様の霊を骨に入るように命じたのです。そのようにしたら骨は生き返ったのです。

ローマ 8:9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中ではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。  
わたしたちはイエス・キリストを信じた時、私達もイエス・キリストを信じた時、聖霊を受けたのです。ここで、神様のみ言葉通り神様の息に向かって預言するエゼキエルの信仰を見てください。彼は神様の命じたとおりにしました、これが信仰です。私たちにできるかどうか、常識で考えないようにしてください。重要なのは神様が言われた通りに従うことです。エゼキエルがみ言葉に従ったときに聖霊が動き始めたのです。